

第35回 泌尿器科中部連合総会シンポジウムⅡ

膀胱癌の診断と治療における最近の進歩

司会：金沢大学医学部泌尿器科学教室（主任：久住治男教授）

久 住 治 男

司会のことば

膀胱癌は泌尿器科領域の最もポピュラーな疾患のひとつであり、それだけにこのシンポジウムに求められるところが大とおもわれる。今回診断2，治療4の主発言のほか，抗癌剤感受性試験2の指定発表をくわえ，それぞれの分野での新しい知識や成績を発表していただいた。このなかには未だ進歩とまでいえないものもあるが，今後の発展と，各位の注目をえるためにあえて登場してもらった。なおこのシンポジウムの2週間まえに，膀胱癌の根治治療に関する国際会議が，スウェーデンでひらかれ，小生が出席の機会があったので，そのなかから各位の参考になる点をまじえながらスピーカーの発表を進めたいとおもいます。

膀胱癌の腫瘍マーカーにはとくに優れたものが見いだされていないのが現状であるが，松浦 健博士と，浜見 学博士に，それぞれ DNA ヒストグラム，血液型抗原の膀胱癌の malignant potential の予測の可能性について発表していただいた。この点につき Prof. B. Tribukait は335例の未治療膀胱癌につき，DNA ヒストグラム分析を行ない，aneuploid cell line は3 cm 以下の単発，乳頭状腫瘍では25%に過ぎないが，3 cm 以上では50%，多発性では60%と増大し，また非乳頭状腫瘍では90%以上，CIS では100%に認められることを明らかにしている。さらに S-phase cell population は再発と，有為の関係にあることを示している。これらの研究は，これまでの組織学的診断とともに，細胞の生物学的活性を評価する診

断法の早急な一般化を求めるものといえよう。

清原久和博士，松田 実博士から，TUR 症例のなかに約10%の予後不良症例のあることや，進行膀胱癌の化学療法の困難性について述べられたが，この成績はいずれも新しい malignant potential 評価法や，個特異性のある抗癌剤感受性試験の必要性をうったえるものである。内藤克輔博士と山内民男博士から感受性検査の現状を発表してもらったが，なお多くの技術的問題のあることが示された。

膀胱全摘には，尿失禁が常に問題となるが，宮川美栄子博士は術後の生活内容の向上について強調され，Kock pouch の優位性を強調された。今回スウェーデンの，Prof. Kock の手術を見学することができたが，現地では一般的意見として，なお観察期間の必要性，膀胱癌における適応など，慎重な意見が多いことが印象的であった。しかし，このような術後の生活の向上が，一層問題になる時代にあることは認識されねばならない。

広範な CIS に対する新しい治療法として，ヘマトポルフィリン誘導体と，Argon-dye laser の赤色光を用いた光化学療法を三崎俊光博士から発表してもらったが，なお，多くの問題を解決しなければならないことがしめされた。しかし今後の研究課題として注目する価値があると考えられた。

以上各発表のごく一部を取りあげたに過ぎないけれど，各演者の研究成績が少しでも日常の診療に参考になれば幸いである。

（1986年3月11日受付）